

&lt;巻頭言&gt;

## 創立 100 周年記念号の発刊にあたって

鷹野 景子

(東京家政学院大学長)

大江スミ先生が1923年に家政研究所を開設し、本学は2023年に創立100周年を迎えた。東京家政学院大学紀要第64号が、創立100周年記念号として発刊されることは、望外の喜びである。

創立50周年誌は、14-15合併号として、1975年に発刊されている。収録論文の中に、故林太郎先生のお名前があることに気づいたのは、つい最近のことである。論文のタイトルは、「過去約100年間のわが国女性の名の変化について（第2報）三島学園と東京家政学院の卒業生についての調査研究」である。林太郎先生は、昭和2年以来、東京女子高等師範学校、お茶の水女子大学、東京家政学院大学及び理化学研究所において、化学の教育と研究に携わった方である。私は、林太郎先生の愛弟子の故前田侯子先生に、お茶の水女子大学理学部化学科において有機化学のご指導を受け、林先生の光化学に関する業績等を伺っていた。

論文のタイトルが、化学分野ではないものの、女性に関わる論文であったので、あの林太郎先生かもしれない、と直感的に考えた。なぜなら、林太郎先生は、私財を投じて、林基金（正式名称は、公益信託林女性自然科学者研究助成基金）を設立され、数多くの女性研究者の育成に力を注がれた方であるからである。林基金では、若手女性研究者への研究助成（研究費助成）、博士後期課程在学者や博士研究員への奨励金（林フェロー）、国際研究集会や共同研究のための海外渡航費支援の3本柱で、女性研究者の育成に大きな貢献があった。林基金を設立した理由は、林先生を誠心誠意支えていらっしゃった奥様への感謝の思いであったと伺っている。実は私も、30歳前後の頃に研究費助成を受けた一人である。

本学の創立者大江スミ先生が、女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）を卒業され、やがてそこで教鞭もとっていらしたことから、また、家政学という学問分野の共通性からも、女子高等師範学校との縁があることは自然な流れであると改めて感じた次第である。そして、本学において研究と教育に携わって来られた多数の優れた研究者に敬意と感謝を捧げたい。

この50年の間に、女性や女子大学を取り巻く環境は大きく変わり、急激な少子化が進む状況をいかに乗り切っていくかが、日本社会全体で取り組むべき課題となっている。また、大江スミ先生が英国での留学経験から構想した東京家政学院での家政学を中心とする学びの本質は不変であり、時代を超えて、その重要性は一層高まっている。生活者の視点からの家政学と社会科学系の学びとの掛け合わせ、横断的で広がりのある学びは、予測困難な時代を生きる若者にとって必要不可欠なものである。そして、本学が2025年に開設する生活共創学部は、それを具現化するものと位置づけられる。

大学においては、研究の成果を教育に生かしていくことが求められており、本学では長年に渡ってその努力を継続してきた。本学の100周年という節目に発刊される本号が、東京家政学院大学、大江スミ先生、そして大江文庫等に関する研究を含む研究論文が発表される場となることを嬉しく思うと同時に、次の100年への飛躍を期するものとしたい。

